

あしば 足場ケース：ゼロからイチにするのが苦手です ～足場かけ(スキャフォールディング)をどの程度すべきか～

ケースを読む前に

- (1) 出された課題を前に、立ちすくんでいる学習者を見たことがありますか。その学習者は具体的にどのような困難を抱えていましたか。
- (2) 靴を履くときにブーツストラップがあるように、初めの一步を踏み出すのが困難な学習者に、言語学習を行ううえで、どのような支援ができると思いますか。
- (3) 学習者にグループワークをさせるとき、教師はどのような役割を担えばよいのでしょうか。どこまで支援すればよいのでしょうか。グループ内での相互支援があれば、教師の足場かけは不要でしょうか。

本ケースの学習者は肢体不自由であることから、高校まで特別支援学校に通っていました。そこでは、学習者一人ひとりに合わせて、教師が手厚くサポートする体制が取られていました。大学進学後も、障害支援室を中心に、本人の希望にできるだけ沿った支援計画が練られ、合理的配慮がされていますが、このような学習者にどの程度、こういった配慮をすべきか、現場の教師は戸惑うことも少なくありません。

本ケースでは、障害の有無に関わらず、初めの一步を踏み出すのが困難な学習者に関するケースをとおして、言語教師がどのような足場かけ(Scaffolding)をすることができるか、またすべきかについて考えます。

ケース：ゼロからイチにするのを手伝って欲しいです (田中花子)

わたしは東京にある私立大学で、韓国語を教えています。専門に韓国語を学ぶ学生のクラスを担当しています。この大学では、2年次に全員が1年間の交換留学に行ける制度もあります。

わたしが担当する1年生のクラスにあゆみさんという学生がいます。彼女は生まれつき脳性麻痺による肢体不自由で、車椅子に乗って生活しています。韓国ドラマを見てハマってしまい、独学で韓国語の勉強を始めたそうです。あゆみさんは「車いすに乗っていると、体だけが不自由で、あとは何も問題がないと思われることが多いんですが、脳性麻痺による肢体不自由児に多い特徴として、事柄の順序や要点を整理して話したり聞いたりすることや、視覚的な情報処理が苦手です。わたしの場合は他にもさまざまな問題がありまして、興味のないことや、やるべきことの優先順位をつけるのも苦手で、見通しのない課題に対する不安が大きいです」と語ってくれたことがあります。

「特別支援学校から大学への進学は大変だったでしょう？」と彼女に聞くと、この大学には、障害学生支援室があって困ったときは何でも相談できる体制が整っているので、進学を決意したとのこと。「わたしの場合は、授業を聞きながらノートを取るといった同時処理が苦手なので、ホワイトボードや黒板の撮影をお願いしていて、それでも追いつかない授業についてはノートテイクがっ

いています。障害学生支援室の担当者の方とはLINEでもつながっているのですが、大学内で困ったことがあったら、いつでも連絡でき、とても助かっています」と話してくれました。

さて、私の授業のことに話を戻します。言語の背景にある文化や社会を知ること重要であるので、韓国に関することを調べてグループでスライドにまとめて発表するような課題を出しました。あゆみさんたちのグループは、どうにも進まないようで、声をかけてみると、何から手をつけていいかわからないというのです。あゆみさんは真面目で勉強熱心で、理解力も高く、知識も豊富で、人と話すことも好きな彼女ならうまく進めてくれると思っていたので意外でした。支援学校でもたくさん調べ学習をしてきたそうですが、「見通しのない課題が苦手」というあゆみさんの特性によるものなのでしょうか。グループワークに限らず、彼女は「ゼロからイチにするのが苦手だ」とよく言います。わたしから言わせれば、そこを考えるのが勉強ですし、これは障害の有無とは関係ないのではないのでしょうか。探検家コロンブスの名言にも、「0から1を創るのは難しい。1から2を作ることは易しい」とあります。

最終的には彼女たちのグループも立派に発表したのですが、どうやって準備したのかと聞いてみると、実は家族に手伝ってもらったとのこと。韓国の何について調べるのか、テーマを決めたら、それについて知りたいことを具体的にスライドに打ち込んで、それぞれの項目について分担して調べてまとめたと言います。あゆみさんのグループは、結局あゆみさんが家族のアドバイスを受けながら皆を引っ張っていったそうですが、「最初に例えばテンプレートがあるからといって、みんな同じのができるかっていうとそうでもなくて、最初のところをふって、そこからあとは頑張っただけ、自由ねってやると結構、クオリティーの高いものができました。1から10にするのは、とても得意なので」と語ってくれました。

外国語の授業に限らず、「足場かけ(スキャフォールディング)」が重要というのは、私も聞いたことがあります。どの程度の足場かけが必要なのか、特にグループワークについては、教師が支援しなくても、グループ内で相互支援していく過程こそが学びだと考えているので、なおさら考えてしまいます。教師がどこまでヒントを出すべきなのか、みなさんはどのように考えますか。「協働の学びの中にこそ真の学びがある」と考えて授業設計しているので、あゆみさんのような特性を持つ学生の支援は、教師ではなく、ともに学ぶ周りの学生がすべきではないのでしょうか。今回あゆみさんのグループでは、グループワークやスライド作成の経験がない学生が集まって右往左往してしまったようですが、つまり、障害を持っていないくても、自力では先に進めない学生が多くいるということですよ。日本では小学校からグループで活動することも多いはずなのに。

大学生はもう大人ですし、一人ひとりのサポートをどの程度すべきなのか考えてしまいます。自分の授業準備や研究活動もありますし、学内外で多くの業務を抱えている中で、すでに成人年齢を迎えた学生一人ひとりの自主性や主体性を尊重しつつ、どこまで寄り添えばいいのか、どの程度足場かけをすべきなのか悩む毎日です。

いろいろな声

あゆみさん

特別支援学校では、特性に合わせて個人指導や学習計画の作成など、行き届いた手厚い指導がありました。ハングルのこととか韓国語のことを全く分からない英語の先生が韓国語のテストを作ってくださったこともあり、そのことにすごく感謝しています。先生方のサポートのもと、何としてでも覚えるぞという意欲につながったと思います。大学では毎回授業で分からない箇所を自宅に帰ってまず整理して、どこが分から

ないのか分かるようにして、それから自分で解決できないところは次の授業までに個別指導を受けています。個別指導の際には、自主学習で解いたプリントや教科書の問題をチェックしていただいています。先生方は、私がほぼ毎回、授業後に研究室に伺うので大変だとは思いますが、嫌な顔一つせず粘り強く教えてくださるので非常に感謝しています。このように、いつもサポートがある中で学んできたので、自分一人では、何から手をつけてよいのかわからないことが多いんです。こんな私は甘えているでしょうか。

田中先生

あゆみさんは頑張りやさんで、わからないところはそのままにしないで教師に質問したり、クラスメートと力を合わせて作業したりする、コミュニケーション能力もあります。ただ、彼女はよく、「ゼロからイチにするのが苦手だ」というのです。私に言わせれば、そこがまさに大事なところで、教師がそこを手伝ってしまったら勉強にならない気がするので、一人ならともかくグループワークなのだから、みなで意見を出し合ってゼロからイチを生み出してほしいと思います。家族に手伝ってもらうのではなく、クラスメートとの対話の中でそれができなかったのか、もしできないのだとしたら、それはどうしてかが知りたいです。

花山先生

グループワークやプロジェクト型の授業において、簡単に作業工程を示したり、過去に同じ課題に取り組んだ学生の作品を見せたりするのは、必要な足場かけだと思います。それをしないでテーマだけ与えて「好きにやりなさい」というのでは、期待した成果が上がるかどうかかわからず、講義もしないで学生に作業だけさせて座っているのは、わたしに言わせれば教師の怠慢ですね。評価方法をルーブリックなどで事前に示すだけでも、作業のヒントになると思います。個人の課題においても、学生がゼロからイチを生み出せるよう対話しながら、共に考えることが教師の仕事と言えるのではないのでしょうか。ただ、最近の対話型生成AIの進化を見ていると、そうした対話の相手をAIが務めることもできそうです。言語学習において必要な足場かけは何なのか、生身の人間である教師が果たす役割とは？といったことまで考えてしまいますね。

国際交流課の職員：水川さん

学生の留学準備を支援する中で、自閉スペクトラム症（ASD）の傾向を持つ学習者に関わったことがあります。実は、わたしにはASD診断が出ている家族がいるので、いろいろな本を読みましたが、コミュニケーションおよび相互関係の障害で、ASDの学生はグループワークが苦手なように思います。冗談や比喩が理解できなかったり、非言語的なサイン（表情・目配せなど）を読み取るのが苦手だそうです。同一性へのこだわりや興味・関心の狭さも特徴で、予定の変更などにも対応がしにくく、特定の物事に強いこだわりがあるため、テーマさえ決まればとことん調べる傾向もありますが、自分に関心のないことには力を注げないという傾向も指摘されています。また、ASDの人は、耳からの情報処理が苦手なことがあり、指示が聞き取りにくかったり、聞き間違えたり、長い説明が途中で分からなくなったりする場合があるそうです。こうした知識を持っていたことで、どのようなサポートが必要か、少しは考えて支援できたように思います。

「グループワークだから、学生どうして助け合うこと自体が大事な学習」という田中先生のお考えはわからなくはないですが、そもそも学生や私たちに、こうした困りごとへの知識が不足しているので、

学生に丸投げするのはちょっとどうかと思います。教師や職員が学習者を見かけたら、適切な声かけ、足場かけをする必要はあるのではないのでしょうか。

これから先は、ケースについて考えます ケースについて、個人レベル、学習空間レベル、社会レベルという三つのレベルの問いに即して考えることをとおし、ケースが埋め込まれている状況を詳細かつ多面的に理解します。いずれの問いに関しても、明確な答えはありません。ケースをもとに、各自で想像したり、グループのメンバーとやりとりしたりすることをとおし、自分なりの答えを見出します。

問A：個人レベルの問い

- Q1：あゆみさんと同じように、あなた自身、「何から手をつけてよいかわからない」、「ゼロからイチにするのが難しい」と感じることはありましたか。それはどんな時ですか。
- Q2：田中先生、花山先生それぞれの教育観について、あなたはどのように思いますか。教師がまず何らかの「足場かけ」をするのか、初めから手助けはせずに、学習者同士が相互に補い合うことを黙って試しているべきなのか。
- Q3：課題と情報のリンクがうまくいかなかったり、情報を処理してまとめたりするのが苦手な学習者がいます。課題の出し方、情報の提供の仕方をどのように工夫すれば、はじめの一步が踏み出せると思いますか。

問B：学習空間レベルの問い

- Q1：あゆみさんのようにゼロからイチにするのが苦手な学生がクラスにいた場合、ペアワークやグループワークをさせるときに、教師としてどんな配慮が必要になりそうですか。
- Q2：どのような点を意識して一緒に活動するよう、学生たちに声かけしたらよいと思いますか。
- Q3：あゆみさんのような特別支援学校からの進学や、高校まで何らかの支援を受けてきた学生が入学することがわかっている場合、大学として（教員として、または職員として）事前にどのような準備が必要だと思いますか。

問C：社会レベルの問い

- Q1：教室に限らず、わたしたちの身の回りには、肢体不自由のあゆみさんのように困難を抱えていることが目に見えるような人と、そうでない人がいるはずです。どうしたら、同様に手助けすることができると思いますか。
- Q2：教師は学生に対して、「今はわたしが手伝ってあげるけれども、これくらいできないと、社会に出てから困るのはあなたですよ」といったことばを言いがちです。それについて、どう思いますか。
- Q3：言語（外国語）学習に限らず、学習においては、個人でできること（個人で努力すべきこと）がたくさんあります。生成AIの進化に伴い、今後ますます個人のレベルや興味・関心に沿って、カスタマイズされた学習が進むことでしょう。「足場かけ」の意義や具体的方法はどのように変わっていくと思いますか。